

〈書評〉

北原恵編著

『アジアの女性身体はいかに描かれたか
——視覚表象と戦争の記憶』

(青弓社、2013年 304頁 ISBN: 978-4787233523 3,570円)

小西 あゆみ



昨今、戦時下の日本と植民地における文化的状況についてポストコロニアリズムの視点から論じられる機会も増えてきたが、本書はこの問題を取りわけジェンダーの視点から切り取っている。編者によると本書は、2010年夏に大阪大学で開かれた、慰安婦表象を中心とした女性身体表象についてのシンポジウムを端緒に企画されたという。本書はこの研究分野の現段階の成果として受け止められるであろう。本書は3部構成からなり、日本人女性美術家の活動、植民地の女性・慰安婦表象についての7本の論文と、現代アーティストによる1本のエッセイ、韓国近代美術研究史の概要、現代アーティストを紹介する4つのコラムで構成される。以下、論文を中心に内容をみていく。

「第1部 女性美術家は帝国日本をどう生きたのか」、「第1章 戦時下の日本の女性画家は何を描いたか」で、小勝禮子は、女性画家である長谷川春子と赤松俊子（丸木俊）を中心に論じている。ここでは近年発見され戦時中に描かれた長谷川の絵画3点、また女性美術家奉公隊の活動、それから赤松の絵本が紹介されていた。これらを概観しながら、小勝は、女は平和を担うといった一般的な女性観とはうらはらに、女性画家が戦争に協力していった事実を示している。女性画家が戦況にのまれていくなか、際立って注目されるのは、赤松によるインドシナの人々を描いた2点の絵画《アンガウル島へ向かう》、《休み場》である。小勝はそれらの作品を、「同時代の男性画家たちの「南洋の楽園」に向けたオリエンタリズムの眼差しをも超える、壊れやすい肉体をもった「人間」の存在の、脆弱さとかげがえのなさに肉薄したもの」と評する。確かに白黒の図版からさえ繊細な肉体表現と重苦しい雰囲気が伝わり、赤松がこれらに帝国日本に対する批判を込めたのではないかと考えさせられた。図らずも赤松の南洋を舞台にした絵本は戦争協力的とみなされうる側面を有していたが、これらの絵画を赤松に描かせた背景や発表時の反応などを検討することによって赤松の一面的ではない眼差しを考察することができるであろう。次の論考でこれらが明らかにされることが期待される。

「第2章 戦時下の美術家・長谷川春子——《ハノイ風景》(1939年)の絵を中心に」で北原恵は、長谷川の植民地での足跡を丁寧に追っている。長谷川の残した出版物では、彼女の「従軍」の経験があたかも武勇伝のように生き生きと語られる。北原はそれらの記述を紹介しながら、長谷川が階級や性差を乗り越え、彼女の主体性を拡張していった側面を指摘する。さらに北原は、戦後に戦時中の女性画家の活動が忘れ去られてしまったことの意味を女性帰還兵の議論と合わせて考えることを促しているが、この指摘は示唆に富んでいる。これは女性画家に対する単なる無関心といった話ではなく、言説の場におけるジェンダー規範を逸脱していた女性画家に対する作為的な無視と象徴秩序の回復とが共犯関係にあったことが浮かびあがる。

「第2部 植民地と/の女性表象の政治性を問う」、「第3章 日本統治下の植民地の美術活動」で、ラ

ワンチャイクン寿子は、植民地における官展の作家を取り上げ、彼/彼女らの作品における「地方色」、日本の作家・作品との「同質性」に注目している。例えば、ゴーガン《海辺の女性》を参照した、朝鮮の作家李仁星による《秋のある日》は、日本に統治の根拠として「未開」のイメージを提供している。その一方で、ラワンチャイクン寿子は、ここに描かれている土着のイメージは作家のアイデンティティでもあり、また荒廃した情景は「日本統治下の朝鮮の大地と人が瀕死の状態にあること」の暗示でもありと示唆し、「地方色」の両義性を指摘し、解釈の可能性を広げている。論文で述べられている通り、「地方色」や「同質性」が強調されている作品は帝国日本の価値観に迎合しているとして看過されがちなのに、今後批評や作家の意図について精査されることが期待される。

「第4章 植民地期韓国のモダンガールと遊女」で、金恵信は、まず、植民地韓国において、モダンガールの表象が植民地の近代化を可視化するものとして、多く描かれたことを論じている。そして、妓生のイメージは朝鮮の画家、また日本人の画家らによって多く描かれ、「国際的に消費され」たことを指摘する。特に興味深いのは、日本画壇の重鎮の作家による、例えば、速水御舟の《蝸蝓（カルボ、妓生の蔑称）》、土田麦僊《平牀》について、淫らな娼婦と品のある芸者という妓生の二面的なイメージのありようが論じられ、しかも、妓生を取引する場面を描いた土田の《妓生の家》が「郷土色」の範を示すものであったと、重要な批判がなされていた箇所である。これらの指摘や批判はもともとであると感ずるが、モダンガールや妓生を二面的な女性像として考察する際、男性主体のありようを合わせて論じていけば分析がより豊かになったのではないか。各男性画家のジェンダー/セクシュアリティ、画家達のホモソーシャルな関係性などの観点からみていけば、女性像が生産される構造が明確になるのではないか。

「第5章 近代化のための女性表象——「モデル」としての身体」で、児島薫は、日本近代の男性画家が、ヌードの女性を描くことで男同士の連帯を築いていたこと、また、西洋では女性化された日本を着物服の女性として発表し、日本では西洋の女性イメージを発表するなど、「女性身体の使い分け」を通して、特権的な男性画家の主体を構築していった過程を論じていた。美術学校において女性ヌード・デッサンが盛んに教えられる現在の状況やその位置づけを考える上でも、本稿は大変興味深かった。また、特に藤島武二を中心とする男性画家による植民地の女性像についての分析は強い説得力をもっていたと思う。従来、藤島の民族服の女性像とルネサンスの様式との関連は、そのイメージが大家による特異なものであるにもかかわらず、深く追求されてこなかった。児島は、藤島が、かつては榮えていたが現在は衰退した場としてイタリアを女性的な場とみなすフランス近代の男性画家のまなざしを共有するとともに、彼らに同一化し、植民地をイタリアになぞらえて、イタリア・ルネサンス期に描かれた横顔の肖像画に倣って民族服を着た植民地の女性を描いた、と分析している。美術史研究の分野では、ジェンダーの視点から、また政治的な関係を考慮しイメージの分析を進める余地が多く残っているのではないかと改めて思う。

「第3部 「慰安婦」表象は戦争の記録をどう語るか」、「第6章 古沢岩美が描いた「慰安婦」——戦争・敗戦体験と「主体」の再構築」で、北原恵は、まず、古沢による娼婦像が過剰なセクシュアリティの表象として原爆と結びつけられていたこと、また、古沢の従軍によって得られた娼婦観と慰安婦観、それが「清潔」な「美少女」のイメージから「不潔」で「不気味」なものへと変化したことを示す。そして、古沢自身が語る「慰安婦へのオマージュ」として制作された《なぐさめもだえ》(1949)の複雑な画面構成の一つ一つのモチーフを読み解き、機械の時代へと進んでいかなければとする古沢の進歩的

な歴史観が表されていること、さらに画面手前の女が慰安婦の「宿命の赤い糸」を乗り越えている、ということも古沢の関連作品を参照しながら論じている。北原は、本作を、脅威的な存在として認識されるようになった娼婦像が統御され、男性主体が回復する過程にある作品として位置付けている。

「第7章 日本映画にみる〈在日〉女性と朝鮮人〈慰安婦〉、その声の不在」で、高美智は、1960年代の3本の映画を取り上げている。まず大島渚『日本春歌考』について、女でもあり在日でもあるという二重のマイノリティである金田は「女の歌」として「満鉄小唄」という満鉄の朝鮮人売春婦の春歌をうたうが、同年代のベ平連に参加する日本人男子・女子学生たちに流用される、そうした構造をもつ映画であるという分析がなされる。また、岡本喜八『血と砂』を例に、1960年代の男のロマンティズムの対象として慰安婦が日本兵と友好的に描かれる傾向を指摘する。さいごに鈴木清順『春婦伝』について、田村泰次郎による原作がコロニアルなまなごしで朝鮮人慰安婦を描いていたのに対して、映画作品では、日本人慰安婦が乗り越えられなかった日本の帝国主義を乗り越える、強い主体性と批評を担う存在として朝鮮人慰安婦が描かれていることが指摘されていた。

第3部では、日本人男性画家・映画監督による在日朝鮮人、慰安婦表象が取り上げられていた。この部では、日本人男性にとって都合のいいようにいかに娼婦・慰安婦像が書き換えられていたかということ、また体制への批判として彼女たちの声が流用され、発せられるも、その声はほんの僅かなものであったのではないかと感じた。これらの論考を読んだ後で、当事者について関心が向いた。コラムで紹介されていたイトー・ターリやアルマ・キントらの活動はダイレクトに性暴力の問題と向かい合っており、彼女らの作品を通して他者の痛みに触れられるような感覚を抱く。当事者の声へのアプローチがさらに必要であるし、そうしたアプローチは戦争と女のテーマを考えていく強い動機にもなりうるのではないか。

実際のところ、15年戦争と以降の日本社会の問題についてリアリティをもって受け止められていなかった自分を感じていた。だが本書を読んで、嶋田美子が述べていたように (p.207)、問題が見えなかった自身の視線を振り返り反省するきっかけになった。本書は、戦争美術の議論で省かれていた女性画家の関与を論じ、慰安婦表象を読解した貴重な一冊であるが、読後は、個人がこの問題をどのように受け止め向き合うか、その態度が問われる一冊である。

(こにし・あゆみ／埼玉県立高等学校非常勤講師)